経済と経営 *29－3* (1998. 12)

〈論　文〉

自己意識と自由（2）
――ヘーゲル『精神現象学』（「自己意識」論）図解――

高田　純

〈目　次〉

I　はじめに
II　自己意識の本性　(第29巻第1号)
III　自己意識と生命　(本　号)
IV　自己意識と他の自己意識
V　自己意識と相互承認
VI　承認の闘争
VII　主人と奴隷
VIII　相互承認と共同体

III　自己意識と生命

A　自己意識の対象としての生命

〈全訳〉

「［b　自己意識と生命　〈生命〉］

35)　［7］ 対象は自己意識にとっては否定的なものであるが，しかし，このよ〈104〉

うな対象は自分のがわでは，〈我々にとって〉，あるいはそれ自体で自分自身へ還帰して zurückkehren いる。それは，他方のがわからみて，意識が［自己意識として］自分自身へ還帰しているのと同様である。対象はこのように自分へ反照すること Reflexion によって，生命 Leben となっている。自己意識が，存在しているものとして自分から区別するもの［対象］は，存在するものとして定立されているという点にかぎっても，たんに感覚的確信や知覚のようなあり方を自分でもつのではない。このように自己意識から区別されたものは，自分へ反照した存在である。［今や］直接的な欲求 Begierde の対象となっているのは，生命あるもの ein Lebendige である。というのは，〈自体〉（それは事物の内面に対する悟性の関係から生じた一般的結果である）は，区別されないものを区別し，あるいは区別されたものを統一するものである〈10からである。

［8］　ところで，この統一は，すでにみたように，同様に自分から自分をつき離すものである。この統一の概念は二つに分裂して sich entzweien，自己意識と生命との対立となる。前者の自己意識は統一であり，さまざまな区別の無限な統一は自己意識のこの統一に対して存在する。これに対して，後者の生命はこの統一それ自身［それ自体］であるにすぎず，この統一が同時に自分自身に対して［対自的に］存在するのではない。このように，意識は自立的であるが，同様にその対象もそれ自体で自立的である。自己意識は端的に自分に対して存在し，その対象にそのまま直ちに否定的なものという性格を刻印するのであり，さしあたりは欲求となっている。自己意識はそのためむしろ，対象が自立的であることを経験をするのである。/」

1　生命における自己統一と自己意識

ヘーゲルは自己意識の運動と構造を立ち入って分析するにさき立って，それを生命の運動と構造との関係で説明しようとする。自己意識は自分を外的

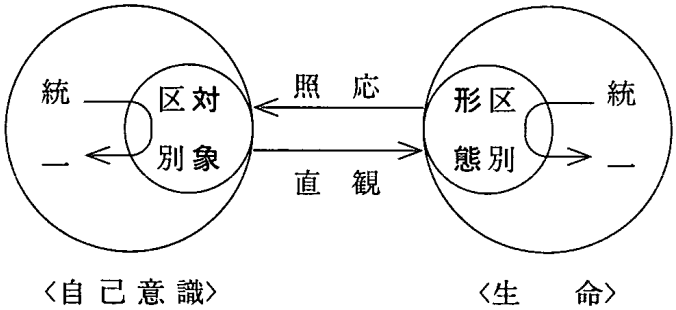
対象と自分自身とに区別するが，この対象は生命であるといわれる。しかし，このような説明は唐突であり，理論的必然性を欠くようにも思われる。生命との関係の考察から出発することはそもそも自己意識論にとって不必要ではないのか。ちなみに『エンチュクロペディー』第2，3版の「小現象学」ではこのような説明はとられていない。

ヘーゲルがもともと問題としているのは，自己意識が対象のなかに自分を見出すことができるためには，対象はどのような基本構造をもっていなければならないかである。すでにみたように（II－3），自己意識は，自分を自分から区別して，他者（外的対象）としながら，そのなかに自分を見出し，自己統一を維持する。じつは，これから検討するように，生命も自分を区別しながら，自己統一を維持するのであり，この点で自己意識と類似の構造をもつ。このため，自己意識は生命を自分の対象とするといわれるのである。

「対象は……自分自身のがわでは，〈我々にとって〉，あるいはそれ自体で自分自身へ還帰している。それは，他方のがわからみて，意識が［自己意識として］自分自身へ還帰しているのと同様である。対象はこのように自分へ反照・反射することによって生命となっている。自己意識が，［自分の外部に］存在しているものとして自分から区別するもの［対象］は……たんに感覚的確信や知覚のようなあり方を自分でもつのではない。このように自己意識から区別されたものは，自分へ反照した存在である。［今や］直接的な欲求の対象となっているのは，生命あるものである」[7]。

ここで，対象が「自分に還帰して」「自分に反照する」といわれることは，対象が，区別のなかで自己統一を維持するようなあり方になっていることを指している。対象は生命であることによって，このようなあり方を明確に表現するのであり，このため自己意識は生命のなかに自分を見出すことができるのである。自己意識がさしあたり「欲求 Begierde」という形態をとり，生命を対象とするといわれることも，自己意識がこのような生命のなかに自分を見出そうと求めることを指している（I－5，VI－A－3参照）。

このことを図式化すると，下のようになる。



2 自然における自己統一

これまで概略として述べられたことを詳しくみると，つぎのようになる。生命概念の導入は自然についての前後の考察と連関している。「自己意識」の章にさきだつ「意識」の章の最後の段階では，悟性は現象を「力の発現」ととらえ，またさらに現象を統一するものとしてその内部に「法則」を見出すといわれた。ここで念頭におかれているのは無生物的（物理的，化学的）自然である。Ⅰ－2でみたように，悟性がとらえる法則は，固定された静的な統一であって，現象の多様性（区別）を真に統一するものではとはない。しかし，じっさいには，統一は区別を自分のなかに含んでいる。

区別のダイナミックな統一は「無限性」とよばれる（Phä. 124ff./*99ff.*）。固定的な把握にとらわれる悟性は，統一と区別との関係をめぐって動揺せざるをえない。このことをつうじて〈我々にとっては〉[1]，統一と区別との結合が「一般的結果」として明らかになる。この意味でつぎのようにいわれる。「対象は……〈我々にとって〉，あるいはそれ自体で……自分へ還帰している」[7]。「生命の規定は，我々がこの［自己意識の］領域に入るさいにもっていた［無限性の］概念や一般的結果から生じているとおりのものである。」[8](135/*105*)

区別のダイナミックな統一（無限性）はまず生命のなかにみられる。生命についての詳しい分析がおこなわれるのは「理性」の章の「観察する理性」

の部分においてであるが(150ff./*199ff.*)，「自己意識」の章の最初の部分では，それがさきどりされ，自己意識との関係において考察される。

「自己意識が，存在しているものとして自分から区別するもの［対象］」は，「自分へ反照した存在である。」「というのは，〈自体〉（それは事物の内面にたいする悟性の関係から生じた一般的結果である）は，区別されえないものを区別し，あるいは区別されたものを統一するものであるからである」[7]。「ところで，この統一は［静態的なものではなく］，すでにみたように［120f./*96f.*］，同様に自分から自分をつき離す［動態的な］ものである。このように，この統一の概念は二つに分裂して，自己意識と生命との対立となる」[8]。

ここでは，区別における自己統一（無限性）の概念が生命と自己意識とに分かれると述べられている。さきに(III－1)，自己意識は自分を外的対象と自分自身とに区別するが，この場合の外的対象は生命であるといわれたことを勘案するならば，自己統一の概念を主体としてみたものが自己意識であり，対象としてみたものが生命であるといえよう（III－1の図を参照）。

3　生命と自己意識との相互対応

ところで，自分を区別しながら自分を統一するという生命のあり方は，そもそも「自己意識」の章でではなく，「意識」の章で無生物についての考察につづけて示され，そこから自己意識の考察へ移行した方が整合的であるといえるかもしれない。じっさい，「意識」の章の最後の部分では，区別における統一（無限性）の原理は「生命の単純な本質」をなすといわれ，簡単にではあるが，生命に言及されている(Phä.125/*99*)。また，『エンチュクロペディー』初版（一八一七年）の「小現象学」では，意識から自己意識へ移行する部分で生命がとりあげられ，生命についての意識が自己意識であると説明されている。自己意識はそれ自身区別の自己統一である点で，生命性の原理をもっており，このため，生命のなかに自分を見出すことができるといわれる[2)]。し

かし，『精神現象学』では，このことの分析はすべて「自己意識」の章の導入部分に移される[3)]。

「自己意識」の章では，最初は自己意識の対象が生命とされ，生命の運動と構造が分析されるが(本章のB)，そのあと再び自己意識についての考察へ移っていく(C)。この方向は予めつぎのように示される。生命は，区別における自己統一という点で自己意識と類似の構造と運動をもっているため，自己意識は生命のなかで自分自身を対象とし，意識することができる。これに対して，生命は自分自身ではその自己統一を対象とすることができない。ここに生命の限界があり，自己意識へ移行しなければならないとされる。

統一の概念は「二つに分裂して，自己意識と生命との対立となる。前者の自己意識は統一であり，さまざまな区別の無限な統一は自己意識のこの統一に対して存在する。これに対して，後者の生命は，この統一それ自身［それ自体」であるにすきず，この統一が同時に自分自身に対して［自覚的に］存在するのではない」[8]。

このように，生命はその他者としての自己意識をつうじてのみ自分を対象とできる。自己意識はいわば生命にかわって生命の統一（類）を対象とするのである。少しあとの箇所ではつぎのように説明される。

生命の普遍的統一は「単純な類である。この類は……自分に対してこのような単純なものとして現存しているのではなく，……自分とは別の或る他者に，すなわち意識を指し示している。意識に対して生命はこの統一として，いいかえれば類として存在する」。「このような他者としての生命に対して類はそのものとして存在し，また，このような生命は自分自身に対して類である。それはすなわち自己意識である」[16]（Phä.138/*107*）。

一方で自己意識はそれ自身生命性の原理をもっており，このことによって生命のなかに自分を見出すが，他方で生命も自己意識を自分の他者としてもち，これをつうじて自己統一的なものとしての自分自身へかかわる。したがって，生命と自己意識とは，1でみたようにたんに相互に構造的対応の関係に

あるだけではなく，相互に他方を求めあうという動態的な関係にある（この面はC－6で詳しくとりあげる）。

ところで，「自己意識」の章における生命を，「意識」の章で扱われた非生命的自然の延長上で，自然的生命ととらえるのは狭すぎるであろう。C－7でみるように，ヘーゲルは汎生命論的な世界観をとっており，生命性を世界全体（自然および精神）の存在論的原理とみなしている。「自己意識」の章で問題となるのは，自然的生命の具体的あり方ではなく，存在論的あるいは形而上学的な（ヘーゲル特有の意味では論理学的）次元での生命を含む，生命一般の運動と構造であるというべきであろう。生命が自己意識の対象であるということは，このような理論的次元で理解されなければならないであろう。

B　生命の基本構造

〈全訳〉

「［9］　生命の規定は，〈我々が〉この［自己意識の］領域に入るさいにもっ〈105〉ていた［無限性の］概念や一般的結果から生じているとおりのものである。

36) 生命を特徴づけるためにはこれで十分であり，生命の本性をそこからさらに展開させて説明する必要はないであろう。［しかし，あらためて確認すると，］生命の本性がなす円環はつぎのような諸契機のなかに含まれ，完結している。［生命の］本質は，すべての区別が廃棄されたあり方としての無限性であり，軸回転する運動である。それは，絶対的に静止することなく活動する unruhig 無限性でありながら，運動自身の静止・安定 die　Ruhe［アリストテレスの〈不動の動者〉を想起］である。すなわち，それは，運動の諸区別を自分へ解消する自立性そのものである。それは時間における単純な本質であり，またこのように自分と同等である点で空間のなかで堅固な gediegen 形態をもつ。しかし，諸区別はこの単純な普遍的な媒体のなかに［解消されたものとして］ありながらも，同時にやはり諸区別としてある。というのは，この普

遍的流動性は諸区別を廃棄するかぎりでのみ，その否定的本性をもつが，諸区別が存立していbestehenなければ，それらを廃棄することはできないからである。

[10] まさにこの流動性は，自己同等的な自立性としてそれ自身で存立しており，諸区別の実体であって，そこでは諸区別は区別された分肢（分節，項）Glieder として，自分に対して［自立的に］存在する部分として存在する。［ここでいわれる］存在はもはや，たんに存在を抽出したもの［たんに〈ある〉］という抽象的な意味をもっておらず，また，諸区別の純粋な本質性も，普遍性を抽出したものという抽象的な意味をもっていない。諸区別の存在は，自分自身のなかでの純粋な運動というあの単純な流動的な実体［にもとづくもの］である。しかし，これらの分肢の相互の区別が区別として存立するのはそもそも，無限性のあるいは純粋な運動それ自身の契機がもつ規定性においてにほかならない。/

[11] 自立的な諸分肢は自分に対して存在する。しかし，このような対自存在はむしろそのまま直接的に統一へ反照する。それと同時にまたこの統一は自立的な諸形態へと分裂する。統一が分裂するのは，それが絶対的に否定的な，すなわち無限な統一であるからである。［このように］統一が存立することによって諸区別はもっぱらこの統一のがわに自立性をもつ。形態のこの自立性は規定されたものとして，他者［実体］に対するものとして現象する。というのは，それは［他者が］分裂したものであるからである。このかぎりでは分裂の廃棄は他者によって生じる。ところで，分裂の廃棄は同様に形態のがわでも生じる。というのは，まさにあの流動性が自立的な形態の実体であるからである。しかし，この実体は無限である。このため，形態は，自分で存立しながらも分裂するものであり，あるいは自分の対自存在［自立性］〈10
を廃棄するものである。/

(137) [12] 〈我々が〉，ここに含まれた契機をより詳しく区別してみると，自立的な諸形態の存立を第一の契機としてもっていることが分かる。すなわち，

それ自体で区別化をおこなうもの［実体］を抑圧することが第一の契機となる。いいかえれば，［このようなものが存在するとすれば，諸形態はそれ自体では存在せず，存立しないことになるが，このように］それ自体で存在せず，存立しないというあり方を抑圧することが第一の契機となる。しかし，第二の契機もあり，それは，あの［形態の］存立を区別の無限性［普遍的実体］へと従属させることである。第一の契機に属するのは，存立する形態である。形態は自分に対して［自立的に］存在するものとして，あるいは規定されながらも［それ自身］無限な実体であることによって，普遍的な実体に対抗し，［普遍的実体の］この流動性およびそれとの連続性を否定する。形態は，自分がこの普遍的なもののなかで解消していると主張するのではなく，むしろ自分のこの非有機的自然から自分を分離し，この自然を消費・摂取する aufzehren ことによって自分を維持すると主張する。

［13］　すべてをあまねく流動化させる媒体［実体］のなかにある生命は，静かに諸形態を相互に分離する auseinanderlegen が，まさにこのことによって諸形態を運動させるのであり，このようにして過程 Prozeß としての生命となる。単純な普遍的流動性は〈自体〉であるが，これに対して，諸形態の区別は他者である。しかし，この流動性はそれ自身，この区別［が生じること］によって他者となる。というのは，流動性は今や区別に対して存在するからである。［このばあいは］この区別の方がそれ自体でかつ自分自身に対して［即自的かつ対自的に］存在し，したがって無限の運動をおこなうのであり，この運動をつうじて，静かに安らうさきの媒体は消費される。これが，生きたものとしての生命［のあり方］である。

［14］　しかし，［形態と媒体との関係の］この転倒はこのために再びまた，それ自体において転倒されたあり方である。［さきの考察によれば］消費されるのは本質である。［このことをさらに分析するとつぎのことが明らかになる。］個体［形態］は普遍的なもの［媒体］を犠牲にして自分を維持し，自分自身との一体性の感情をえながら，まさにこのことによって他者（これをつ

うじて個体は自分に対して存在するのだが)との対立を廃棄する。個体は自分自身との統一を自分にもたらすのであるが，この統一はまさに諸区別を流動化させ，あるいはあまねく解消する。しかし，逆に［統一が］個体の存立を廃棄することは，またそれを生み出すことである。というのは，そのばあいには，個体的形態の本質，普遍的な生命，および自分に対して存在するものがそれ自体で単純な実体であるからである。したがって，このようなものは他者を自分のなかに定立することによって，このような自分の単純なあり方，あるいは自分の本質を廃棄する。いいかえれば，それは単純なあり方を分裂させる。そして，区別をもたない流動性がこのように分裂することはまさに，個体を定立することである。したがって，生命の単純な実体は自分自身を諸
(138) 形態へと分裂させると同時に，これらの存立する区別を解消する。そして，［区別を］解消することはまた同様に［自分を］分裂させること，［自分を］分肢化することである。

［15］ 区別されていた全運動の両側面，すなわち，自立性の普遍的媒体において静かに分離されていた形態化［諸形態］と，［諸形態を解消する］生命過程とは相互に帰入しあう。後者の過程は自立的形態を廃棄することであるとともに，形態化する［形態を生み出す］ことである。また，前者の形態化は分肢化であるとともに，その廃棄である。流動的な場 Element はそれ自身 〈1(
本質を抽象したものにすぎない。いいかえれば，それは形態としてのみ現実的となる。それが自分自身を分節化することは再び，分節化されたものを分裂させること，あるいはそれを解消することである。このような循環の全体が生命をなす。生命をなすものは，最初の段階で表現されたもの，すなわち生命の本質の直接的・無媒介的な連続性や堅固さでもなく，存立する形態でもなく，自分に対して存在する分裂［相互に分離された形態］でもなく，また［形態を解消するという］純粋な過程でもなく，さらにこれらの契機の総括でもない。自分を展開しながら，その展開を解消するような，またこの運動において自分自身を単純に維持するような全体が生命をなす。/」

1　生命と無限性

生命をもつもの（有機的なもの）と，もたないもの（非有機的なもの）との区別はどこにあるのだろうか。いずれについても，それらの特徴をなす規定性（規定されたあり方 Bestimmtheit）は，自分から区別された他者に対する関係において与えられる。この意味で，規定性は他者に対するあり方（対他存在 Für-anderes-sein）である。生命の個別的形態も「規定されたものとして，他者に対するものとして，現象である」[11]。ところで，非有機的なものは他者によって規定されるにとどまり，さまざまな規定性を自分で統一することはできない。悟性は，事物の現象を統一するものを法則に見出すが，この統一は悟性が現象のなかにもち込んだものであった（II－2）。これに対して，有機的なものは諸規定性を自分で統一する。のちの「観察する理性」の部分ではつぎのようにいわれる。

有機的なものは「絶対的流動性であり，そこでは，自分をもっぱら他者に対して存在するもの［対他存在］とするような規定性は解消されている。非有機的な事物は規定性を本質としており，そのため他の事物と合わさることによってのみ，概念の諸契機を完全なものとする……。これに対して，有機的な存在者においては，諸規定性をつうじて他の存在者に対して開かれており，これらのすべての規定性を有機的な統一のもとに結合する」（Phä.193/*145*）。

生命は区別を生み出しながら，これを自分で統一する。すでに悟性の段階で，このように，その統一のなかに区別を含むものは「無限性 Unendlichkeit」であるといわれた（124f./*99f.*）。悟性は無限なものをたんに有限なものと対立したものとみなしている。しかし，有限なものからきり離された無限なものはいつまでも有限なものとの対立にまとわりつかれたままであり，それ自身有限なものにすぎない。しかし，A－2で言及したように，〈我々にとっては〉自己意識の考察にさきだって，無限性の概念は悟性の考察から生じた「一

般的結果」として明らかになっている［7］。自己意識論では，生命のなかにこの無限性がいかに具体的に現われているかが詳細に分析される。

「［生命の］本質は，すべての区別が廃棄されたあり方としての無限性であり……，運動の諸区別を自分へ解消する自立性そのものである。それは時間における単純な本質であり，またこのように自己同等である点で空間のなかで堅固な形態をもつ。しかし，諸区別はこの単純な普遍的な媒体のなかに［解消されたものとして］ありながらも同時にやはり諸区別としてある。というのは，この普遍的流動性は諸区別を廃棄するかぎりでのみ，その否定的本性をもつが，諸区別が存立していなければ，それらを廃棄することはできないからである。」［9］。「まさにこの流動性は，自己同等的な自立性としてそれ自身で存立しており，諸区別の実体であって，そこでは諸区別は，区別された分肢として，自分に対して［自立的に］存在する部分として存在する」［10］。

生命における諸区別と統一との関係は，分肢（形態）と媒体（実体）との弁証法的な関係としてとらえられる。一方で，諸分肢は実体から分離されて，自立的なものとして存在するが，他方で，実体は固定的な分肢の諸区別を流動化させ，それらを自分のなかで統一する。しかし，また実体のこの運動は分肢が区別されたものとして自立的に存在することを前提しているのである。

2 生命とその分肢

生命は諸区別を統一することによって「形態」をそなえ，空間のなかで具体的なものとして現れる。生命の「形態 Gestalt」「形態化 Gestaltung」についてはのちの「観察する理性」の部分でつぎのような説明が登場する。

「外的なものは……形態化一般であり，存在という場 Element のなかで自分を分肢化する vergliedern 生命の組織体系 System である」（Phä. 211/

159)[4]。

α）形態のがわからみると，形態は実体から自立して，存立する。*β*）しかし，形態は実体を自分の存立の基盤としている。このことを実体のがわからみると，実体は自分を分裂させることによって，形態を自立化させる。したがって，形態が他の形態との分離を解消してそれとの統一をえるのは，実体に作用によってである。*γ*）このことを再び形態のがわからみれば，形態がそれ自身で自分の自立性を否定し，他の形態との統一をえるといえる。形態は区別を流動化させる本性をもつ。

「［*α*］　自立的な分肢［形態］は自分に対して［自立的に］存在する。しかし，このような対自存在はむしろそのまま直接的に統一へ反照する［還帰する］。［*β*］　それと同時にまたこの統一は自立的な形態へと分裂する。統一が分裂するのは，それが絶対的に否定的な，すなわち無限な統一であるからである。［このように］統一が存立することによって諸区別はもっぱらこの統一のがわに自立性をもつ。形態のこの自立性は規定されたものとして，他者［統一］に対するものとして，現象する。というのは，それは［実体の］分裂したものであるからである。このかぎりでは分裂の廃棄は他者［実体］によって生じる。［*γ*］　ところで，自立性の廃棄は同様に形態のがわでも生じる。というのは，まさにかの流動性が自立的な形態の実体をなすからである。……したがって，形態は自分で存立しながらも分裂するものであり，あるいは自分の対自存在［自立性］を廃棄するものである」［11］。

3　生命の形態化と過程

ヘーゲルは，さらに諸形態の運動と実体の運動との関係を，諸形態の自立化と，実体における諸形態の解消とのダイナミックな関係と説明する。

「〈我々が〉，ここに含まれた契機をより詳しく区別してみると，自立的な諸形態の存立を第一の契機としてもつことが分かる。」「しかし，第二の契機

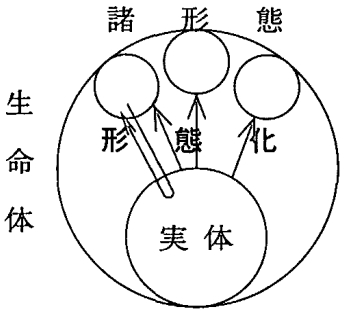
もあり，それは，あの［諸形態の］存立を諸区別の無限性［普遍的実体］へと従属させることである」[12]。

諸区別，諸形態 Gestalten が実体から分離して，自立するという「第一の契機」は「形態化 Gestaltung」とよばれ，これに対して，実体が諸区別の自立性を否定して，これらを自分の統一性へと解消するという「第二の契機」は生命の「過程 Prozeß」とよばれる。

a） 形態化についてはつぎのようにいわれる。形態は実体から自立し，実体を「消費・摂取し aufzehren」，犠牲することによって，自分を維持する[5]。生物について具体的にいえば，このことは，生命体の内部で諸器官が全体から栄養などを獲得しながら，自立的に活動することを意味するであろう。

「第一の契機に属するのは，存立する［自立的な］形態である。形態は自分に対して［自立的に］存在するものとして……普遍的な実体に対抗し，［実体の］この流動性およびそれと連続性を否定する。形態は，自分がこの普遍的なもののなかで解消されていると主張するのではなく，むしろ自分のこの非有機的自然から自分を分離し，この自然を消費・摂取する aufzehren ことによって自分を維持すると主張する」[12]。

以上のことを図式化すると右のようになる。

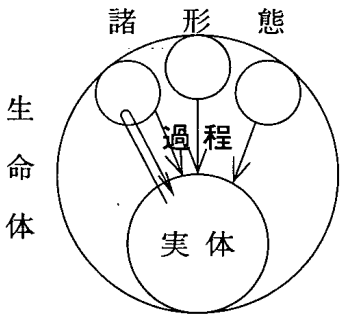


〈形 態 化〉

b） 実体のがわからみると，実体は諸分肢を活動させながら，それを全体の維持のために奉仕させる。実体は諸分肢の自立性を奪って，これらを自分のなかで統一する。生命の内部におけるこの運動が生命の「過程」である。生物についていえば，この過程は，生命がその諸器官を産出し，これらの活動をつうじて自分の全体を再生産することを指しているであろう。

「しかし，第二の契機もあり，それはあの［形態の］存立を諸区別の無限性へと従属させることである」[12]。「すべてをあまねく流動化させる媒体の

なかにある生命は，静かに諸形態を相互に分離するが，まさにこのことによって諸形態を運動させるのであり，このようにして過程としての生命となる」[13]。



〈生命過程〉

この側面は右のように図式化できよう。

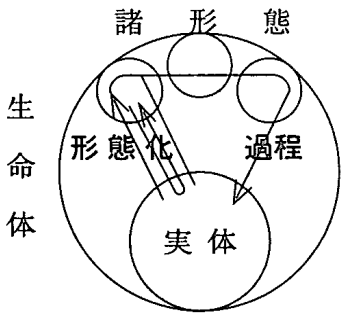
c）　aの形態化とbの生命過程とは相互に結合している。そのため一方は他方へ，また他方は一方へと相互に移行し，あるいは反転する。分肢のがわからみれば，それは実体（普遍的媒体）を犠牲にすることによって，自立化する。しかし，このことは，分肢が逆に実体によって支えられていることを示している。実体のがわからみれば，それは諸分肢を全体の維持のために奉仕させ，それらの自立性を否定する。このことは，実体が自分を分裂させ，分肢を生み出すことを意味する。

「それ［形態］は……，自分がこの非有機的自然［実体］から自分を分離し，この自然を消費することによって，自分を維持すると主張する」[12]。「諸形態の区別は……それ自体でかつ自分自身に対して存在し，したがって無限の運動をおこなうのであり，この運動をつうじて，静かに安らう例の媒体は消費される」[13]。「しかし，［形態と媒体との関係の］この転倒は再び，それ自体で転倒されたあり方である。［さきの考察によれば］消費されるものは本質である。［このことをさらに分析するとつぎのことが明らかになる。］個体［形態］は普遍的なものを犠牲にして自分を維持し，自分自身との同一性の感情を自分に与えながら，このことによって他者［普遍的なもの］……との対立を廃棄する。個体は自分自身との統一を自分にもたらすのであるが，この統一はまさに諸区別を流動化させ，あるいはあまねく解消する。しかし，逆に［統一が］個体の存立を廃棄することは，またそれを生み出すことである。」「したがって，生命の単純な実体は自分自身を諸形態に分裂させると同時に，これらの存立する区別を解消する。そして，［区別を］解消することは

また同様に［自分を］分裂させること，［自分を］分肢化することである」［14］。

形態と実体とは生命の全体的運動の二つの不可分な側面をなす。さきには，生物における区別と統一との相互連関が示されたが，両者の関係はまだ静態的なものにとどまっていた。しかし，今や両者の関係は形態（形態の自立化，形態化）と実体（実体による形態の解消，生命過程）との動態的結合ととらえられる。

「区別されていた全運動の両側面，すなわち，自立性の普遍的媒体において静的に分離されていた形態化と，生命過程とは相互に帰入しあう。後者の過程は自立的形態を廃棄することであるとともに，形態化することである。また，前者の形態化は分肢化であるとともに，その廃棄である。」「このような循環の全体が生命をなす」［15］。



〈生命の運動〉

以上をまとめて右のように図式化できよう。

C 類と自己意識

〈全訳〉

(138) 「［16］ 最初の直接的・無媒介的な統一から出発し，形態化と［生命］の〈1(
過程をへて両契機の統一へ，したがって再び最初の単純な［区別されない］実体へ還帰したが，このことによって，このように反照した統一は最初の統一とは別なものになっている。最初の直接的な統一，あるいは存在とよばれた統一と対比すると，この第二の統一は普遍的な統一であり，それはこれらのすべての契機を，自分のなかで廃棄したものとして含んでいる。この統一は単純な類 Gattung である。この類は生命自身の運動のなかでは自分に対してこのような単純なものとして現存するのではなく，以上のような結果のな

かで，自分とは別な或る生命，すなわち意識を指し示しているauf verweisen。意識に対して生命はこのような統一として，あるいは類として存在する。/」

1　個体と類

B－3までみてきた『精神現象学』における生命について考察は，他の著作や論稿におけるそれとはやや異なっている。一八〇五－〇六年『イエナ実在哲学』の「自然哲学」（JR II. 115f./*120f.*，本多修郎訳『自然哲学』下，未来社，211頁以下），および後期の「自然哲学」（『エンチュクロペディー』第2部）では，生命は，α）形態Gestalt（形態化Gestaltung），β）同化Assimilation，γ）類の過程Gattungsprozeß，という側面から考察されている（Enz. N. §346－§352）。この点は中期の『大論理学』（Log. II. 417ff./*181ff.*，邦訳，下，270頁以下），あるいは後期の「小論理学」（Enz. L. §218－§220）もほぼ同様である。

α）「形態（形態化）」の段階で論じられるのは生命とその諸分肢（器官）との関係である。諸分肢は相互に他の分肢を手段としながら，自分を維持するが，諸分肢のこのような活動をつうじて生命はその全体を維持する。これは生命の「内部過程」とよばれる[6]。ここでは，「自己意識」の章におけるように，実体からの分肢の自立化としての「形態化」と，実体への分肢の解消としての「過程」とが明確には区別されていない。なお，この内部過程は，感受性，興奮性，再生（再生産）を含むとされる(Enz. L. §218 Zu., Enz. N. §353)。このことには『精神現象学』の「観察する理性」の部分でも言及されている[7]。感受性と興奮性は生命体の外的環境に対する関係においておこなわれるが，ヘーゲルはこれらをあくまでも生命の内部過程に属するものと説明する。

β）　形態化が生命体の自分自身に対する内的関係であるのに対して，「同

化」は生命体の外界に対する関係である。生命体は環境（それは「非有機的自然」と総称される）を自分へ取込むことによって自分を維持する。動物においては，個体と外界とのあいだの矛盾から欠乏が生じ，それはさらに「欲求 Bedürfnis」が生じる（Enz. N. § 360)。しかし，『精神現象学』の「自己意識」の章では生命体の外的環境に対する関係には全く論及されていない。「観察する理性」の部分では，生命体の環境に対する関係一般が分析されてはいるが，同化は扱われていない。生命体の環境に対する関係と自己意識の対象に対する関係のあいだには類似性があるので（いずれも「欲求 Bedürfnis, Begierde」をもつ)，この側面が立ち入って検討されてもよかったように思われる。しかし，ヘーゲルは「自己意識」の章では，生命体内部における自己統一の運動と構造の考察に主力を注ぎ，生命体の環境に対する関係に言及することなく，類の考察へと進んでいく。この点は「観察する理性」の部分でも基本的に同様である（Phä. 216ff./*163ff.*)。

γ)　生命体の実体は具体的にいえば「類 Gattung」である[8]。類は，もろもろの個体を支配する普遍的実体である。類は諸個体を生み出しながら，自分を維持する。個体は死滅していくが，個体相互の関係（性関係）をつうじてつぎの世代の個体を生み出す。このように個体の系列をつうじて類は維持されるのである。「小現象学」ではつぎのようにいわれる。

「生きた個体は，第一の過程［形態化］において自分において主体……としてふるまうが，第二の過程をつうじてその外的客観性を自分へ同化し，実在的規定性を自分のなかに定立する。このようにして今や個体はそれ自体で（即自的に）類，すなわち実体的普遍である。類の特殊化は主体［個体］と，それと同類の他の主体［個体］との関係である。［ここでの］根源分割［判断］Urteil は，このように［相互に］区別された諸個体に対する類のかかわり，すなわち性別である」(Enz. L. § 220)。「類の過程は類を，自分に対して存在するあり方（対自存在）へもたらす。この過程の産物は……二つの側面に分かれる。一面では，最初は直接的に無媒介に前提されていた個体一般が

今や，［類によって］媒介されたもの，産出されたものとして出現する。他面では，生きた個別はその最初の直接的あり方のために，普遍に対して否定的にふるまい，支配力としての普遍のなかで滅亡していく」（§221）。

『論理学』にはつぎのような叙述がある。

「個体の他の個体との同一性は……さしあたり内的で主観的な普遍性にすぎない。したがって，個体はこのような同一性を定立し，自分を普遍的なものとして実現しようという欲求 Verlangen をもつ。これは類の衝動であって，それは，なお相互に特殊的で個別的な個体性を廃棄することをつうじてのみ実現される。個体性がその緊張した欲求を満足させ，この類的普遍性のなかに解消するようなものであるかぎりで，その実現された同一性は，分裂から自分へと反照した類の否定的統一である。」類の過程においては，「個別的な諸個体はそれらの相互の無関与な直接的現存を廃棄し，このような否定的統一のなかで死滅していく」（Log. II. 427f./*190f.* 邦訳，下，285－286 頁）。

B－3　生命の実体としての類

「自己意識」の章では，類の諸個体に対するこのような関係の考察は省略されている。類には，生命から自己意識への移行を媒介するという重要な位置を与えられるにもかかわらず，この考察はきわめて簡単にすまされている。「自然哲学」などにおける説明を考慮して，ヘーゲルの叙述を補足すると以下のようになろう。

生命における実体はたんに個々の個体の根底にある実体でなく，同類のすべての個体の実体でもあって，それは「類」である。実体と区別化との相互媒介の関係は類と個体との関係にもみられる。B－3－γ では，相互に分離された諸形態は実体の威力によって自立性を奪われ，統一へつれ戻されるといわれた。これと同様に，他の個体に無関与な個体は類の威力によって自立性を奪われ，他の個体との統一へもたらされる。しかし，「自己意識」の章では，

類は個体との関係ではとらえれていない。形態化(形態の自立化)と生命過程(形態の自立性の否定)との結合として登場する生命の実体(自分へ反照した統一)は類であると指摘されるにとどまる。「観察する理性」の章においても基本的に同様である。

「最初の直接的・無媒介的な統一から出発し，形態化と[生命の]過程をへて両契機の統一へ，したがって再び最初の単純な[区別化されていない]実体へ還帰したが，このことによって，このように反照した統一は最初の統一とは別なものになっている。最初の直接的な統一，あるいは[静的な]存在とよばれた統一と対比すると，この第二の[動的な]統一は普遍的な統一であり，それはこれらのすべての契機を，自分のなかで廃棄したものとして含んでいる。この統一は単純な類である」[16]。

3 類の意識としての自己意識

C－1でみたように，生命においては個体は類に埋没し，その威力にまったく服従しており，類を対象とすることはできない。したがってまた，類は個体をつうじて自分を対象とすることはできない。ここに，生命における類と個体との関係の限界がある。

類は「生命自身の運動のなかでは自分に対して[対自的]この単純なもの[実体]として現存するのではない」[16]。

「小現象学」ではつぎのようにいわれる。

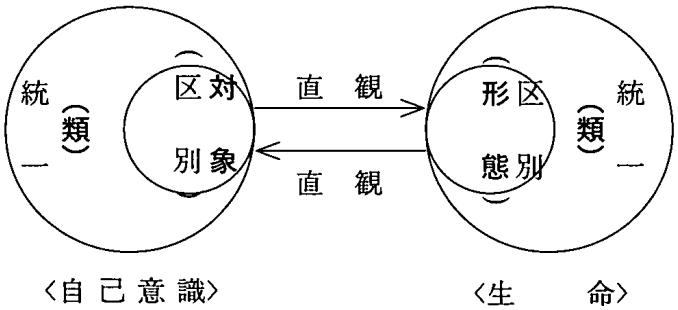
「動物にとっては類の過程がその生きたあり方の最高点である。しかし，動物はその類において自分に対して(対自的に)存在するには至らない。それは類の威力に屈服している」(Enz. L. § 221 Zu.)。

生命の類が対象となるのは，意識(厳密には自己意識)をもった人間においてである。一方で，A－3で触れたように，自己意識は，自分の類を意識する生命である。すなわち，自己意識はそれ自身生命性(区別における自己

統一）の原理をもち，その実体としての類を対象とする。このように，自己意識は自分の類についての意識を含んでいる[9]。他方で，生命はその他者としての意識をつうじて間接的にその実体としての類を対象とするのである。

類は「自分とは別な生命，すなわち意識を指し示している。意識に対して生命は……類として存在する」[16]。「ところで，このような他の生命に対して類はそのものとして存在し，また，この他の生命は自分に対して［対自的に］類である。このような生命はすなわち自己意識である」(Phä.138/*107*)。

これまでは，A）生命が自己意識の対象，他者とみなされ，B）その構造が分析された。そして，C）自己意識は生命における類のなかで自分を自己統一的なものとして見出すことが明らかにされた（自己意識→生命）。だが，このことをつうじて今や，逆に生命が自己意識をその他者とし，このなかで自分の類を対象とすることが示される（生命→自己意識）。このようにして，再び自己意識そのものの構造の分析へと向っていく(IV)。このことを上のように図式化できよう（図III－A－1を参照）。



4　存在論的原理としての生命

以上のように考察された生命はいかなる理論的次元におけるものであろうか。それを自然における生物に属するものに限定していよいであろうか。ここで注意しなければならないのは，ヘーゲルが生命概念を，論理的－存在論的次元，自然的次元，および社会的－倫理的次元を含む広い意味で用いていることである。

ヘーゲルは汎生命論的な世界観をとっている。それによれば，生物だけで

なく，世界（自然全体および精神）が生命的原理にもとづくことによって，ダイナミックな運動をおこない，統一をなす。このような見方はとくにフランクフルト期（1797－1800年）に顕著になり，それ以後，後期に至るまで維持される。「意識」の章ではつぎのようにいわれた。

「この単純な無限［自己統一］……は生命の単純な本質，世界の魂，普遍的血液とよばれるべきもので……ある。これはいたるところに現存し，いかなる区別によっても損なわれ，中断されることがない。それはむしろそれ自身すべての区別であると同時に，［区別の］廃棄されたあり方である」(Phä. 125/*99*)。

ここでは生命は存在論的な意味で理解されている[10]。『論理学』では，論理学的な（あるいは形而上学的な）意味での生命が自然的生命および精神的生命から区別されている。ヘーゲルの論理学は，たんに思考の規則を扱うのではなく，同時に存在の根本秩序（理法＝ロゴス）を扱うものであるから，論理的な意味での生命も世界の根本構造にかかわる。

「生命は……即自的かつ対自的に絶対的な普遍性である。生命が具える客観性は概念によって全く浸透されている。」「部分として区別されたものは……それ自身のなかに全体的概念をもっている。この概念は，これらのもののなかに遍在する魂である。」「ところで，単純な生命はたんに遍在するだけでなく，その客観性の存立［の根底］，内在的実体をなす」(Log. II. 416f./*181*, 邦訳，下，269－270頁)[11]。

5 生命から精神への移行

もちろん，生命が生物を典型あるいは代表とすることも疑うことはできない。生命から自己意識への移行は生物（自然）から精神への移行に対応する。自然においては個体は他者のなかで自分を維持することはできず，他者との矛盾によって没落する。ここに自然の限界，「無力」がある(Enz. N. § 250)。

これに対して，精神は他者との矛盾に「耐え」，他者のなかで自分を維持することができるのであり，このことによって自由である (Enz. G. § 382)。たしかに，自然の最後の段階をなす生命においては，他者における自己維持の原理が登場するが，自然的生命にはつぎのような欠陥がある。個体にとっての他者は外的環境をだけでなく，実体をも含む。個体が自由であるためには，実体のなかで自分を維持しなければならない。しかし，個体は類によって支配され，類のなかで死滅していく。

生命においては個体はその実体としての類を対象とし，そのなかに自分を見出すことはできず，また実体も個体をつうじて自分を対象とすることはできない。これに対して，人間は自分の類を意識の対象とすることができるのであり，このことによって自己意識を獲得するのである。「小論理学」およびその補遺では，このことが生命から精神への移行として説明される。

「動物においては類の過程がその生命の頂点である。しかし，動物は自分の類のなかで自分に対して［自覚的に］存在するには至らない。動物は類の威力に屈服している」(§ 221. Zu.)。「直接的であるにすぎない個体的な生命の死はすなわち精神の出現である。」生命の理念は精神において「その真理へ，自分自身へ到達する。このようにしてそれは，自分自身に対して［自覚的に］存在する自由な類として現存するようになる」(§ 222)。

6　生命体と有機的共同体

自己意識の本質は具体的には「人倫的実体」である。この実体は共同体の原理をなす。ヘーゲルは共同体を有機体的なものととらえる。生命個体と類との関係についての分析は，自己意識（個人）と人倫的実体（共同体）との関係をあらかじめ念頭においたものであるともいえよう。人倫的共同体の問題はやがて「理性」の章のB節の序論的部分で扱われ，「精神」の章で詳細に論じられるものである。「自己意識」の章では，抽象的ではあるが，「我々で

ある我と，我であるとしての我々との統一」という表現が登場する(Phä. 140/*108*)。共同体の有機体論的な理解は「理性」の章におけるつぎのような叙述に示されている。

「これらの最もありふれた諸機能［欲求を満たす個人の諸活動］さえもが……現実性をもつことは，［これらを］支える普遍的な媒体によって，全民族の威力によって生じる。」「自分の欲求のためにおこなう個人の労働は自分自身の欲求を満足させると同時に，他の諸個人の欲求を満足させる。また，自分の欲求の満足がえられるのは他者の労働をつうじてである。」「全体は全体として個人の仕事 Werk となり，個人はこの仕事のために自分を犠牲にするが，まさにこのことをつうじて全体から逆に支えられる」(257/*195*)[12]。

また，「精神」の章ではつぎのようにいわわれる。

「この単純な力［人倫的実体の］は共同体が分節化して，自分を拡張し，それぞれの部分に存立と対自存在［自立性］を与えることを許す。」しかし，人倫的実体は「［個人の］存立の形式を解消することによって，個人が人倫的あり方から離脱して自然的あり方に沈み込むことを防止する。」「この否定的な本質は共同体の本来の威力として現われる」(324/*246*)。

このように，共同体においても，個人が全体に依存し，従属するという面と，逆に全体から自立するという面とが結合している。生物有機体において個体が類を意識するようになることは，共同体において個人がその実体を意識するようになることに対応するであろう。

ところで，個人による共同体の意識化はいくつかの段階をたどる。a）最初の段階は，個人が全体における自分の位置を意識することなく，全体に従属し，全体に埋没している段階である。このような個人の全体に対する無意識的な関係は，生物における個体の類に対する関係と類似の性格をもつ。b）つぎに，個人は全体に対して素朴な意識と信頼をいだき，全体のために奉仕する。この段階にも，個人の意識性や自立性はまだ明確には現れない。c）第三の段階では，個人が自己意識にめざめ，自分の利益を求めて，全体に距

離をおくようになる。しかし，個人は自分の生活の基盤としての全体を離れては存立できない。したがって，個人が全体と対立し，全体から自立化することは挫折せざるをえない。d）ヘーゲルがめざす段階は，個人が共同体における役割を自覚し，それを自発的に遂行することである。この段階では，共同体は個人に自立性を許すとともに，個人の自覚的行為によって支えられる。

「精神」の章では，個人による共同体の意識化の段階が人類史に即してたどられる。個人が共同体に埋没した段階（a）についての記述はない（後期の著作では，古代の東洋がこれにあたるとされる）。個人が共同体に対して素朴な信頼を抱く段階（b）は，古代ギリシアに対応させられている（「A．真の精神，人倫」）。これに対して（c），中世から近世までは，個人が全体から分離し，原子的なものとして自立化する段階と特徴づけられる（「B．自己疎外的精神，陶冶」）。しかし，個人が全体を自覚し，全体との有機的結合を回復する段階（d）は『精神現象学』では暗示されるにとどまる。

注

1）『精神現象学』は「意識の経験の学」という性格をもち，意識が対象との完全な一致へと高まる過程をたどる。当該の意識のこのような歩みを外部から「観望する zusehen」のが〈我々Wir〉である。〈我々〉は，結果をみとおした哲学者の立場にたっている。〈我々にとっては für uns〉は，「哲学者の立場からみれば」という意味である。

2）『エンチュクロペディー』初版の「小現象学」の意識にかんする最後の節ではつぎのようにいわれる。「意識は悟性としてさしあたりは抽象的な内面のみを対象にもち，つづいて法則として普遍的区別を対象にもつが，今や概念を概念を対象にもつ。意識がまだ意識であるにとどまって，対象が意識に対して与えられたものであるかぎりで，意識は対象を，或る生きたものとして直観する。生きたものは，それ自体でかつ自分に対して（即自的かつ対自的に）普遍性，真理であるような内面性である」（Hegel, *Sämtliche Werke*, hrsg. v. Glockner, Bd. 6. § 342）。「しかし，生命についての意識においては自己意識が点火される。というのは，この意識は意識であるかぎり，それから区別されたものとしての対象をもつからである。だが，区別はなんら区別でないの

であって，このことがまさに生命のなかで示される。ところで，意識の生きた対象は直接的なあり方をしているが，このあり方は，現象へ，あるいは否定［否定されたもの］へ引き下げられた契機となっている。この直接的あり方は今や内的区別あるいは概念として意識に対して自分自身を否定する」(§343)。初版を拡充したはずの第2版と第3版では，いかなる理由によってか，初版のこれらの節が削除されている。なお，第3版の「意識」にかんする最後の節の「補遺」にはつぎのような説明がある。「生きたもののなかで……意識は，区別された諸契機の定立と廃棄の過程自身を直観し，区別がなんら区別でないこと，すなわち少しも絶対的に固定された区別ではないことに気づく。」「区別されたもの，……この生きた統一についての意識において……自己意識が点火される」(Enz. G. §423. Zu.)。「補遺」は初版および第2版についてのヘーゲルおよび聴講生のノートにもとづいているが，当該の部分がどの版にかんするものかは明らかではない。

3）『エンチュクロペディー』初版にもとづく1825年の講義録では「自己意識」の最初の節がつぎのように説明される。「自我は生命性に対してふるまうことによって，思考するものである。……このようにして，生きた対象において主観性は生命性そのものとなる。」「自我はそれ自身生きたものであって，その生命性を対象とし，自己意識となる。」 *Hegel's Philosophy of subjective Spirit*, §344, [§424], ed. by M. J. Petry, p. 314. Hegel, *The Berlin Phenomenology*, ed. by Petry. p. 54.（前者の編集版の節番号は『エンチュクロペディー』の初版の節番号のままであるが，後者の編集版では節番号が［ ］内のように第3版のものに合わされている)。

4）「小現象学」ではつぎのようにいわれる。「第一の過程は，生きたものの内部での過程である。この過程のなかで，生きたものは自分自身において分裂し，自分の肉体性をその客体，すなわち非有機的自然とする。相対的に外的なものとしてのこの肉体性はそれ自身において［相互に］区別され，対立した諸契機となる」(Enz. L. §218)。有機体の諸分肢は具体的には諸器官を意味しているであろう。「観察する理性」の部分では，それは「形態の個別的な組織 System 」(Phä.155/*206*) とよばれる。形態化は感受性，刺激性（反応性）および再生（再生産）を含むが，これらにそれぞれ対応する器官は神経系，筋肉系および内蔵（消化系）である（200, 206f./*150, 155f.* Vgl. Enz. N. §353, §354)。

5）ヘーゲルは一般的には「非有機的自然の消費 Aufzehren」を，「有機体としての生物が外的環境(狭義の非有機体だけでなく，他の有機体を含め)を同化する」という意味で用いるが，この用法を拡張して，「活動主体が他者を獲得する」という意味で用いる

こともある。形態が「非有機的自然」を「消費・摂取する aufzehren」というヘーゲルの叙述について，金子武蔵氏は，「環境のことであって，まだ有機化されていないというまでであって，所謂無機的自然ではない」と述べている（『精神の現象学』上，訳者注，511 頁，岩波書店）。だが，当該の個所では，文脈から明らかなとおり，「非有機的自然」は外的な「環境」をではなく，生命自身における「普遍的実体」あるいは「普遍的な流動的媒体」を意味している。マルクーゼは，生命個体にとっての「非有機的自然」を「普遍的生命，普遍的実体の直接的形式」とみなしている（Herbert Marcuse, *Hegels Ontologie und die Theorie der Geschichtlichkeit*, 1932. S. 265. 吉田茂芳訳『ヘーゲル存在論と歴史性の理論』未来社，302 頁）。注 4）の引用における「非有機的自然」の用法も参照。そこでも「非有機的自然」は外的環境を意味していない。

6）『エンチュクロペディー』の「自然哲学」ではつぎのようにいわれる。「有機体は，……自分の過程のなかで自分自身のみにかかわり，自分自身の内部で自分と連結する個別的な理念として考察しなければならない。これが形態である」（Enz. N. § 352, Vgl. § 346）。また，『論理学』では，これに対応する部分がつぎのようになっている。「この生命的個体性の過程は……まだ全く個体性の内部でおこなわれる」（Log. II. 420/184，武市訳，下，275 頁）。注 5）も参照。

7）注 4，参照。

8）ここでいわれる「類」は生命あるものの「普遍的実体」（Enz. L. § 220），「具体的実体」（Enz. N. § 367）であって，たんに分類（個－種－類）における類，あるいは形式論理学（判断）における類（これらは形式的，抽象的な普遍性としての共通性にすぎない）ではない。

9）青年マルクスは『経済学・哲学草稿』で人間を「類的存在 Gattungswesen」ととらえた。「人間は実践的，理論的に類を……対象とする点でだけでなく，自分自身に対して類に対するようにふるまう点で，類的存在である」（城塚登訳，岩波文庫，93 頁）。これはフォイエルバッハの見解を踏まえたものである。彼は『キリスト教の本質』でつぎのように述べている。「最も厳密な意味での意識が現存するのは，或る存在者にとってその類が……対象となっているばあいのみである。」「このようにして，人間は対象において自分自身を意識する。対象の意識は人間の自己意識である」（船山信一訳，上，岩波文庫，48，52 頁）。これは『精神現象学』の自己意識論を念頭においたものかもしれない。

10）マルクーゼはヘーゲルの生命概念の詳細な考察を踏まえて，『精神現象学』における生命概念が「存在論規定」をもつことに注目している（Marcuse, *a.a.O.* S. 258, 260,

前掲訳，295，297頁)。イポリットも「普遍的生命の存在論」に言及している（Jean Hyppolite, *Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel,* 1946, p. 142, p. 144. 市倉宏祐訳『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』上巻，岩波書店，193頁，197頁)。

11) 汎生命論世界観は『精神現象学』の少し前の『イエナ論理学・形而上学』（一八〇四－〇五年)のなかでより明確にされている。そこでは，「客観性の形而上学」が魂，世界，最高存在に区別されたうえで，世界が個体と類との有機的関係ととらえられる。「世界過程においてはこのさまざまな〈自体〉［自立的諸個体］は相互に区別されて現存するようになる。自分を維持する個体は類に移行している。世界過程は類の過程である。類は全体としてその諸契機のなかで持続しながら，それらを相互に区別し，かつそれらのなかに現存する」(LMN. 154/*148*，田辺振太郎訳『論理学・形而上学』未来社，282頁)。

12) この説明は1803－04年の『イエナ自然哲学』におけるつぎのような叙述と照応しているように思われる。「個体を形成し再生産する外的有機体は自分自身によって自分を廃棄し，その個体がそのまま直ちに絶対的な普遍性となるようにする。そのため，個体が自分に対しておこなうことは，そのまま直ちに類全体に対しておこなうことである。動物的利己はそのまま直ちに非利己的であり，非利己性（すなわち個体の個別性の廃棄)は個体の利得である」(JRI. 190/*264*)。ヘーゲルは一方で，生命体を共同体の原型とみなすが，他方では逆に，共同体をモデルとして生命体を説明してもいる。例えば，1805－06年の『イエナ自然哲学』では，有機体における個体と類との関係は「個人と国家［の関係］と同様［であり］，後者の国家は前者の個人の実体［をなす］」といわれる（JR II. 170/*179*)。